

当院における腹腔鏡下鼠径ヘルニア 修復術における取り組みと手術成績

よこ やま やす ひこ やま もと よし お さ とう たかし
横 山 靖 彦 山 本 佳 生 佐 藤 崇
なか しま ゆう いち たちばな まろみ うち だ まさ あき
中 島 裕 一 橘 球 内 田 正 昭

キーワード：鼠径ヘルニア，腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術，TAPP 法

要 旨

当院では，成人鼠径部ヘルニア症例に対して，2012年2月より腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術（transabdominal preperitoneal repair，以下 TAPP 法）を導入した。

【対象と方法】2012年2月から2017年3月までに施行した TAPP 法100症例117病変を対象とし，手術時間，腹膜縫合時間の推移，術後在院日数，術後合併症についての検討と，手術手技の定型化に向けた取り組みを報告する。

【結果】平均手術時間は100.3±39.3分，平均腹膜縫合時間は15.1±6.7分，平均術後在院日数は2.9±2.0日であった。手術手技が定型化できた後期は有意な術後合併症を認めず，手術時間，腹膜縫合時間の短縮も図れた。

【結語】当院での TAPP 法の現状について報告した。治療成績の評価には，本法と鼠径部切開法との比較・検討を行う必要があり，今後も症例を蓄積していく。

はじめに

成人の鼠径部ヘルニアに対する術式は，1990年代に McVay 法などの従来法に代わって Mesh Plug 法などに代表される tension free 術式が一般的となった¹⁾。また同時期に Popp が transabdominal preperitoneal repair（以下 TAPP 法）を報告し²⁾，本邦では1991年に松本³⁾により導入さ

れた。

当時は全身麻酔が必要であること，手技が煩雑であること，鏡視下手術の技術的問題などがあり，普及には至らなかった。しかし，最近になり低侵襲，拡大視効果などの利点から腹腔鏡手術が見直され，TAPP 法は急速に全国に普及している⁴⁾。

当院では，成人鼠径部ヘルニア症例に対して，2012年2月より TAPP 法を導入し，現在では鼠径ヘルニア手術の第一選択としている。当院における TAPP 法の手術成績と定型化への取り組みを報告する。

Yasuhiko YOKOYAMA et al.

松江生協病院外科

連絡先：〒690-8522 松江市西津田8丁目8-8

松江生協病院外科